

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第8号

平成27年4月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

建武の新政を切り拓いた護良親王と楠木正成

全国に号令を下し続けた親王、そして幕府軍を一手に引き受けた正成

護良親王は、建武2年7月、鎌倉において足利直義の命によって殺害されます。この時、正行は10歳と思われ、桜井



の訣別以前の事ですから、おそらくは直接の交誼はなかったのではないのでしょうか。

しかし、後醍醐天皇の笠置挙兵に呼応して、護良親王は吉野で、楠木正成は千早でそれぞれ挙兵し、二人は建武の新政の立役者となります。二人が緊密に連絡を取り合っていたであろうことは、想像に難くありません。

建武新政開始後、後醍醐天皇、護良親王、足利尊氏、この三人の確執・対立を最も憂い、そして存在感を示していたのが正成でした。

正行は、この頃河内、東条にあって、父、正成を通じて護良親王の影響を受けたものと思われる。(写真は「大塔宮護良親王出陣図」より)

護良親王の生涯

護良親王は、父・後醍醐天皇が討幕計画（元弘元年・元弘の変）を企てると、元弘2年（1332）、天台宗・梶井門跡三千院門主を退き、還俗して吉野で挙兵、参戦する。元弘3年（1333）に入ると、正月、幕府方は大軍を投入して護良親王（大塔の宮）が立てこもる吉野の城に押し寄せると、太平記には、村上義光が身代わりとなって護良親王を高野山に逃す件が綴られる。

後醍醐帝が立てこもった笠置の様子を探るた

め、比叡山を離れ、赤坂の地を経て奈良の般若寺に隠れる。

太平記には、般若寺に迫った追手から、仏殿にあった三つの大般若経の唐櫃に難を逃れるという摩利支天あるいは十六禅師（般若経とそれを持つものを護る神）の加護ではないかという演出、特異な運命が描かれている。

三つあった唐櫃のうち、ふたの空いている一つの経典の下に隠れたことが幸いし、追手はふたの閉まった唐櫃だけを確認して、立ち去ったとする件を記している。

難を逃れた護良親王は、熊野、十津川を経て吉野山に入る。この頃、護良親王は隠岐の後醍醐帝や赤坂の正成と連絡を取り合い、全国の宮方武士に令旨を発し、指揮していたと思われる。護良親王と正成の連携が千早城の攻防を支え、後醍醐帝の隠岐脱出を成功に導いた。

元弘3年（1333）6月、建武の新政が始まると、護良親王は征夷大將軍に、尊氏は鎮守府將軍に任命されるが、長くは続かなかった。

三人の確執の結果、その年の8月末、もしくは9月初めのころには征夷大將軍を解任される。

後醍醐帝は、当初、尊氏の野心を牽制する意味から護良親王の取り込みを図ったと思われるが、尊氏襲撃未発事件の証拠を基に、阿野廉子を取り込んだ尊氏の執拗な護良処分の訴えに、尊氏と妥協を図り、結果として護良親王を切ることになる。

討幕の過程で配下になった武士や寺社勢力下の僧兵や修験者を背景に武家政治構想を持つ護良親王と、いかなる武家政治も認めず、公家一統

の政治を目指す後醍醐帝の間には、もともと相容れないものがあったのだろう。

しかし、この逮捕劇でも、正成の存在が浮かび上がる。

建武元年（1334）10月、正成は北条の残党を飯盛山に攻めるため京を不在にしていた。後醍醐帝、尊氏の二人は、この正成不在の間隙を縫うように、護良親王の逮捕に踏み切る。護良親王が頼りとする正成の不在を狙ったことは明らかで、滝覚坊あての書状（「観心寺文書」）と言い、正成の苦悩、そして大きな存在が見て取れる。

逮捕後、鎌倉・東光寺の石牢に幽閉されること9カ月、建武2年（1335）、中先代の乱の混乱に乗じ、足利直義の命によって殺害される。正行同様、波乱にとんだ27年の短い人生を閉じる。

五條市大塔町は、般若寺から熊野、十津川に難を逃れた護良親王が約半年の間逗留したと伝わる町。護良親王を助けた史実を郷土の誉れとするこの地は、明治22年、村名を『大塔村』とするが、「だいとうむら」では恐れ多いと、読みを『おおとうむら』としたと伝わる。

（例会配布資料より）

例会で出された疑問・質問アラカルト

例会では疑問に思ったことや分からないことはどんどん出し合っています。以下に、いくつかの事例をご紹介します。

●菊水は楠家の家紋か？

建水分神社の御略記に、菊水が「楠木氏の家紋」として記されている。



—— 当社の社紋の菊水は楠木氏の家紋としても世に知られる。その名のごとく上半分が菊、下半分が水の流れを表す。

紋様の由来には諸説あるが一説に、皇室御紋である菊は後醍醐天皇より正成公のその忠誠に対し下賜され、水流は楠木氏が氏神として崇拝した当社が水の分配を司る水神であるためとされる。

●後醍醐天皇の親王に使われる「良」には、なぜ「よし」と「なが」の二つの呼び名があるのか？

「良」の読みは古くから「なが」「よし」の両様に読まれてきた。戦前は『なが』が一般的であったが、戦後は『よし』が大勢となっている。

国史大辞典（吉川弘文館）は「もりよししんのう」で解説し、「もりながしんのう」の項には「⇒もりよししんのう」と記載されている。

因みに、漢語林（大修館書店）によると、「良」の文字の「名乗り」（人名の特別な読み）は、なが・よしの他に、あきら・お・かず・かた・すけ・たか・つかさ・なおし・ながし・はる・ひこ・ひさ・ふみ・まこと・み・ら・ろ・ろう、と実に20種類もある。

●東国武士の尊氏が、なぜ九州に逃げたのか？

尊氏の都落ちちは、正成の術中にはまり丹波の篠村（亀岡市）に退いた後、豊島河原（豊中市）の戦いで敗れたことに始まる。

この時、大挙した官軍と激しく戦ったが、まとも、正成が神崎川に沿って今津浜に進出したため、あわてて退却することになる。

太平記によると、九州豊後の大友貞宗がやって来て、「ひとまず筑紫（九州）へ退却なされませ。少弐貞経（筑後）が味方でございますので、九州の勢が多数従いましょう。」と進言したので、尊氏は、西海の大族の兵船二百艘に便乗して西奔した、と記されている。

なぜ九州に落ちたのか、今一つ考えられる。

それは、この頃の官軍は、楠木正成、新田義貞、脇屋義助、千草忠顕らが京の東側から京の都を攻めたことに加え、遅れて北畠顕家が率いる奥羽軍が東坂本に着到したこと等もあり、東への道は官軍に塞がれていたためである。

●天皇に通じる身分の護良親王が、なぜ、武士の棟梁たる征夷大將軍を望んだのか？

「楠木氏三代」の作者、井之元春義氏は、“護良親王自身、父である後醍醐天皇と趣の違った武家政治構想を持っていた”と断じる。

同氏は続けて、“親王の目指す政治は、倒幕の過程で培われたもので、畿内や近国の武士や僧兵、修験者等を中核に糾合した勢力で、加えて討幕の功により与えられた和泉・紀伊の武士勢力、これらの棟梁たらんとした。だからこそ、征夷大將軍への執着も強かったのである”とも記す。

後醍醐天皇の討幕クーデターもそうであるが、この親子には、武士に負けない激しい血が流れていたのではないだろうか。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）